７韻文と文学史

１　次の短歌とその鑑賞文を読んで、後の問いに答えよ。

　　やはらかに①柳あをめる

　　の岸辺②目に見ゆ

　　泣けとごとくに

　第一行で柳の青む［　Ⅰ　］の景を出し、次いで「北上の岸辺」と場所を指定し、最後に「泣けとごとくに」と、思郷の切ない思いをこめる。実に巧みな構成であり、「やはらかにやなぎあをめる」「きたかみのきしべ……」と、それぞれ③韻をふんでいるしらベも美しい。④「目に見ゆ」で切り、最後の一行をえたあたりにも、万感こもごもに迫る心情が圧縮されており、それゆえに「泣けとごとくに」がいやみにならないのである。 （の文による）

問１　―線部①について、柳が青くなったのはなぜか。簡潔に記せ。

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　〕

問２　―線部②の最も適当な解釈を次から選び、記号を○で囲め。

ア　かつて見たことがある。　　イ　眼前に広がっている。

ウ　ありありと目に浮かぶ。

問３　［　］Ⅰに入る最も適当な季節を次から選び、記号を○で囲め。

ア　早春　　イ　初夏　　ウ　初秋

問４　―線部③について、「韻をふんでいる」音を二つ答えよ。

（　　　）（　　　）

問５　―線部④の技法を何というか。漢字三字で答えよ。

〔　　　　〕

２　次の和歌・短歌を読んで、後の問いに答えよ。

Ａ　自転車のカゴからわんとはみ出して

なにかうれしいセロリの葉っぱ

Ｂ　たしき年の初めの初春の

今日降る雪のいやけ

Ｃ　春過ぎて夏来たるらしの

したりの 天皇

Ｄ　君待つとが恋ひをれば我がの

すだれ動かし秋の風吹く

Ｅ　くれなゐの二尺のびたるの芽の

針やはらかに春雨の降る

Ｆ　思ひつつればや人の見えつらむ

夢と知りせばさめざらましを

Ｇ　をゆき子供のを通る時

のせり冬がまた来る 木下

問１　明治以降の近現代の短歌をＡ～Ｇから三つ選んで、記号で答えよ。

（　　　）（　　　）（　　　）

問２　次の条件にあてはまる歌をそれぞれ選び、記号で答えよ。

①　目に映る景色から、季節の移り変わりを知る。 （　　　）

②　強い香りから、季節の移り変わりを知る。 （　　　）

③　新鮮な感じから作者の明るい気分が伝わる。 （　　　）

④　細かいものを見すえ、しっとりと季節をよむ。 （　　　）

⑤　会えない寂しさから、はかないものに心残りを感じる。 （　　　）

３　日本文学における有名な作品について、下の問いに答えよ。

Ａ　はすべて山の中である。あるところはづたいに行くの道であり、あるところは数十の深さに臨む木曽川の岸であり……。

Ｂ　ればの見返り柳いと長けれど、お歯ぐろにうつる三階の騒ぎも手に取るく……

Ｃ　月日はのにして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとす。

Ｄ　男もすなるといふものを、女もしてみむとてするなり。それの年ののあまりの日のの時に門出す。

Ｅ　春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

問１　左の表の各作品の冒頭文を上から選び、Ａ～Ｅの記号で答えよ。

問２　各作品の作者を次から選び、ア～オの記号で答えよ。

ア　　 イ　　　ウ

エ　　　　オ

問３　各作品の説明を次から選び、ａ～ｅの記号で答えよ。

ａ　東北・北陸への旅から生まれた紀行文。

ｂ　幕末から明治への動乱期を描く歴史小説。

ｃ　女性の作に仮託した、最初の仮名書き日記。

ｄ　下町を舞台に、とのほのかな恋を描く。

ｅ　宮廷生活の中から生まれた、鋭い観察で知られる随筆。

問４　それぞれの作品の成立順に、１～５の数字を書き入れよ。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 日記 | 夜明け前 | 奥の | たけくらべ |  | 作品名 |
|  |  |  |  |  | 冒頭文 |
|  |  |  |  |  | 作者 |
|  |  |  |  |  | 説明 |
|  |  |  |  |  | 成立順 |

【解答】

１　問１（例）芽ぶいてきたから。

　　問２　ウ

　　問３　ア

　　問４　や・き

　　問５　倒置法

２　問１　Ａ・Ｅ・Ｇ

　　問２　①Ｃ　②Ｇ　③Ａ　④Ｅ　⑤Ｆ

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 日記 | 夜明け前 | 奥の | たけくらべ |  | 作品名 |
| Ｄ | Ａ | Ｃ | Ｂ | Ｅ | 冒頭文 |
| オ | イ | ウ | エ | ア | 作者 |
| ｃ | ｂ | ａ | ｄ | ｅ | 説明 |
| １ | ５ | ３ | ４ | ２ | 成立順 |

ポイント

１　問４　「はらかになぎ」「たかみのしべ」と語頭に同音が来る語が

置かれている。

　　問５　「北上の岸辺／泣けとごとくに目に見ゆ」が倒置されている。

２　問２　①目に映る「白栲の衣」から、「夏」の訪れを知る。

　　　　　②「蜜柑」の香りから、「冬」の訪れを知る。

　　　　　③「セロリ」の新鮮な感じから、明るい気分が伝わる。

　　　　　④小さな「薔薇の芽」に降りかかる春雨を詠む。

　　　　　⑤寂しさゆえ、はかない「夢」にすがる心情を詠む。